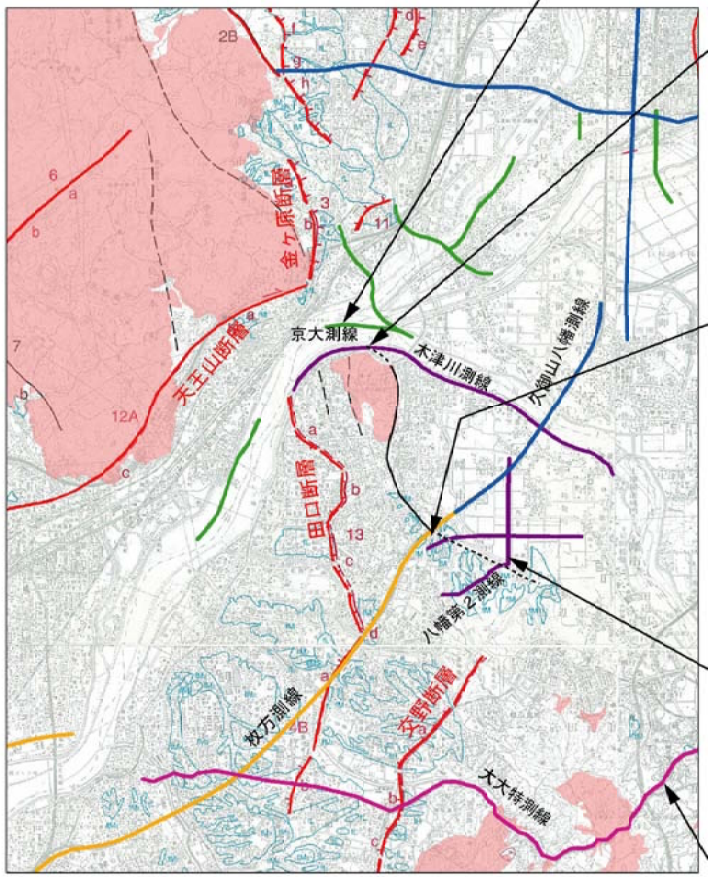
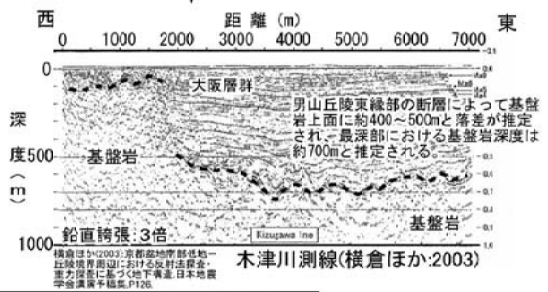
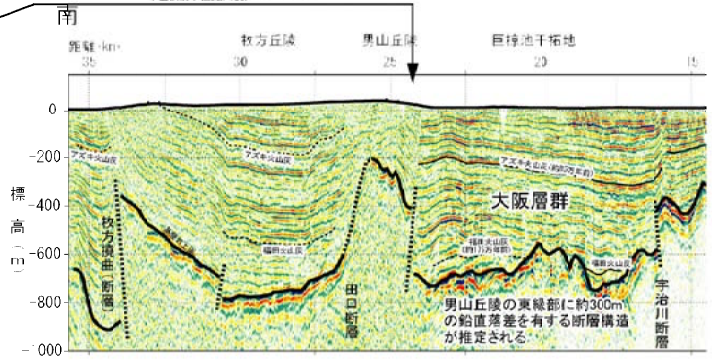
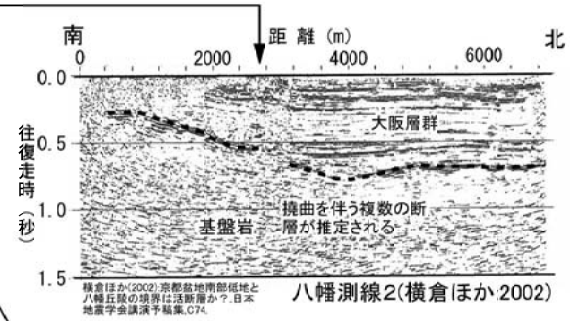
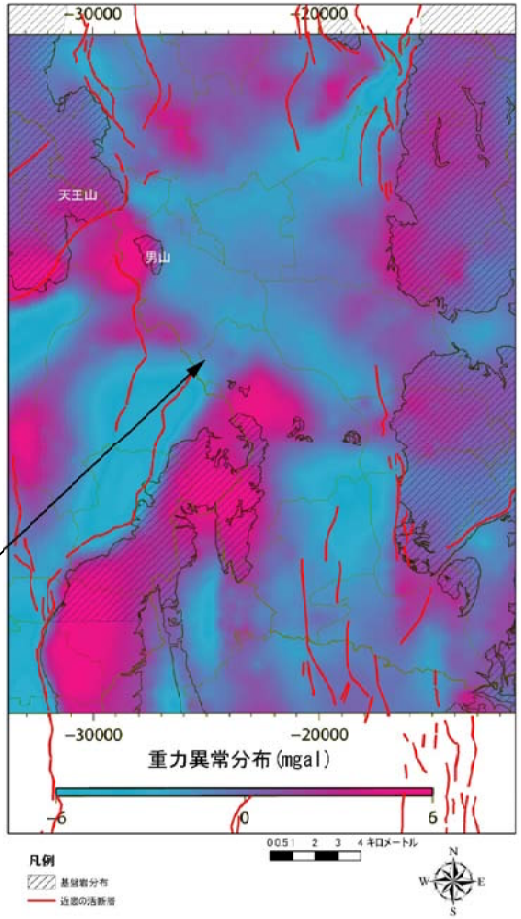


・京都大学、今住・小林(1985)によれば反射法探査御幸橋西方で基盤の約400mの東落ちの落差を推定しているが、断面は不明瞭である。





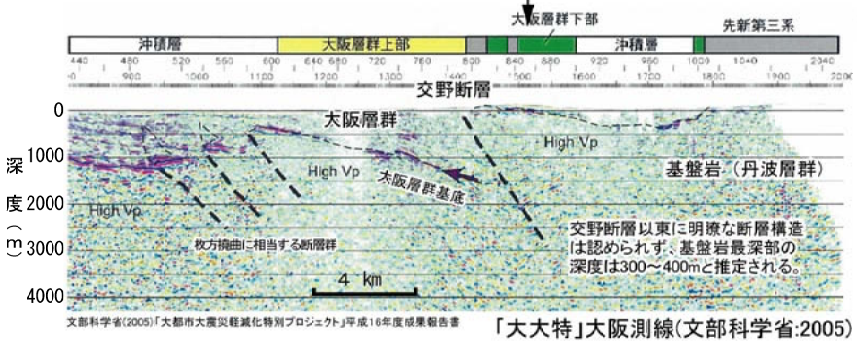




・男山断層の南への延長を重力異常分布から見ると交野断層の北端延長付近で北東方向への落差がほとんど見られなくなる。

・府南部地域の地下構造が京田辺より南で変化する。
・国等の調査を踏まえ、男山東側の断層の南がどこまで延びているのか、北は金ヶ原断層と繋がるのかどうか、さらに検討を要する。

（これまでの調査や研究で金ヶ原断層が男山東側を通り、田辺まで延びると解釈したものはない。
最近の得られた知見を総合し、慎重な検討を要する。）



・交野断層は国の調査において、地下の岩盤が、非常に大きくズレている。ただし調査のターゲットは大深度部分であって、地震被害想定のレベルの深度部分は解析が粗い。
・従来の知見によると、交野断層は男山西側（田口断層）へつながっていくと見られているが、重力異常分布から解釈すると、男山西側につながるとは見えにくい。
ただ、交野断層は東側が西側に比べて盛り上っており、逆に西側が盛り上がっている男山東側の断層へつながるとは考えにくい。

図－３　男山東縁断層の概要